私立大学横山助教授　　連載 10

最近の横山は、ひとが変わったように勉強をしだした。山田もたじたじとなることがある。見ると、必ず、本を二、三冊抱えて、いつも読みふけっている。しかも、その範囲は実に広い。哲学書を読んでいるかと思えば、英語の古典を読んでいたり、先端科学に関する入門書を読んでいることもある。

この前などは、山田にこんな感想をもらしていた。

「世の中で、偉いと崇められている評論家にはいいかげんなひとが多いということがよく分かりました。表層しか語らず、肝心のことが分かっていない」

山田も、テレビに登場する評論家のレベルの低さには辟易することがある。

「あれだけ、テレビに出ていたら、自分でゆっくり勉強する時間がないじゃないですか」

横山は、こう指摘した。おそらく、兵頭のことが頭に浮かんだに違いない。

山田も、最近の兵頭の行動には首を傾げていた。副学長の地位を使って、大学をうまく利用しているとしか思えない。しかも、学生の教育はそっちのけで、いくつものテレビ局をはしご出演している。

ところで、最近の横山の勉学への傾注は感心すべきことであるが、学生たちからは、横山の付き合いが悪くなったと不評である。前のように、一緒に飲みに行ってくれないというのだ。

横山は学生に

「暇なときは、いつでも付き合うよ。だけど、今日は調べものがあるんだ」

と言って、誘いを断っているようであるが、この調子では、横山が暇になる時は当分来そうもない。

そんなある日、横山と山田に臨時教授会開催の知らせが届いた。人文社会学部の教員は、必ず出席するようにと書いてある。

山田は教授会に毎回出席しているようだが、横山はたまにしか出ない。出ても、意味のない内容が多いからである。

教授の中には、会議だけを楽しみにしているものもいる。一度、横山が出席したとき、ある教授がひとりで一時間も話していたことがある。それも、とりとめのない話で、何を言いたいのかが分からない。

「誰かが、止めればいいのにな」

と横山は思ったが、それが難しいらしいのだ。発言を制止しようものなら、それこそ言論弾圧と言って猛抗議をするらしい。

民主主義に反するということらしいが、意味不明の演説を聞かされる側にも人権はある。横山は、あれから会議には顔を出していない。

横山は山田に聞いてみた。
「山田先生、この臨時教授会は、必ず全員出席するようにとありますが、いったい何が起こったのでしょう」
案内には、途中退席も不可で、トイレに行く時には、監視員が同伴するという。また、欠席は、医師の診断書で入院が必要な場合のみ認めるとある。ただごとではない。
「どうやら、セクハラ裁判らしいのです。裁判というと変ですが、ある教授がセクハラで訴えられたらしいのです。明日は、その裁定結果が調査委員会から報告され、その後、教員全員の記名投票で、処分を決定するということです」
「その教授の名前は分かっているのですか？」
「はい、噂では聞こえてきますが、確かなところは分かりません」
「明日は、実名も出るのでしょうか」
「もちろんです。場合によっては、懲戒解雇となるわけですから。ただし、本人は出席しません」
横山は、セクハラ事件がどういうものかは分からなかった。
　しかし、権力をかさに女性を自由にしようとするものがいるなら、それは決して許せないと思っている。
横山は
「私も出席しないといけないのでしょうね」
と言った。
すると、山田は
「当たり前です。無断欠席などしたら、それこそ懲戒処分の対象になりますよ」
と言った。
　会議の日に、山田は心配したのか、横山の部屋まで迎えにやってきた。
横山は
「山田先生、そんなに心配されなくても、私は会議に出るつもりでしたよ」
と笑いながら言った。
　しかし、山田が心配したのは、横山のずる休みではなく、勉強に没頭するあまり、会議のことを忘れてしまうのではないかということだった。
　会議は講堂で行われるという。ふたりで、講堂にいくと、多くの事務職員が警戒にあたっていた。
　受付で、身分証明書の提示と、名簿への記載を求められた。この調子なら、職員がトイレまでついてきて監視するというのは、本当のようだ。山田の説明によると、大学は、マスコミに情報がもれるのを極端におそれているらしい。
　中に入ると、会場は、かなりのひとであふれかえっている。山田は、いつもの教授会に比べて、出席者が多いのに驚いていた。本来は、これだけの人数が

いるのである。
　山田と横山は、隣どうしで座った。机の上には、要返却という判が押した調査報告書が置いてある。横山はぱらぱらとページをめくり、中身を読んでみた。
　訴えを起こしたのは、人文社会学部の大学院生の女性であった。女性の名前は伏せられ、A子としか書かれていない。訴えられているのは、彼女の博士論文を指導していた国文学科の吉永博文教授となっている。
　横山は、教授の名前が分かれば、当然A子が誰かということも分かってしまうのではないかと思った。
　A子は宮田女子大学の大学院修士課程を卒業して、指導教授の紹介で、博士課程のある黎明学園大学に進学した。吉永教授は、最初は親身になってA子を指導してくれていた。
　しかし、ある時から、プライベートのことにも口に出すようになったという。そして、指導と称して、夜遅くまで研究室に残されることが多くなったようだ。
　A子も不審には思っていたが、教授は社会的地位も高く、人格者と認められていたので、教育に熱心のあまり、夜まで指導してくれるのだと自分に言い聞かせていたらしい。
　そして、博士課程の三年目に入って、いよいよ博士論文をまとめようとした頃、食事に誘われたという。A子の労をねぎらうというのが表向きの理由であったが、酒が入ると、吉永は、A子の体を触ってきたという。
A子が
「先生、そんなことは止めてください」
と懇願すると
吉永は、
「こんなことを拒否するのは、自分に対する侮辱だ」
と急に腹を立てたという。
しかし、すぐに
「ちょっとしたいたずら心だよ。悪かったね」
と猫なで声であやまったという。
　その後は、しばらく何もなかったので、A子は安心していたが、夏休みの夜に事件は起こった。
　A子は、論文を半分ほど書き上げていた。その時、吉永から研究室に来るようにと呼び出しがかかった。A子もちょうど、論文で相談したいことがあったので、少し警戒はしたものの、研究室まで出かけていったという。
　部屋に入ると、吉永は少し赤い顔をしていた。大学の懇親会に出席した後だという。吉永は、A子にビールを勧めたが
「研究の相談をするのにアルコールはおかしいです」

そうＡ子が指摘すると、吉永は、酔い覚ましといって、冷えた紅茶を出してきた。Ａ子ものどが渇いていたので、それをいっきに飲んだという。その時、少し変な味がしたが、日本製ではないという吉永の言葉を信じてしまった。
　吉永は、論文の仕上がり具合を聞いたあとで、Ａ子が聞きたいと思ってまとめてきたメモを読み始めた。
　すると、Ａ子は急に睡魔に襲われたという。論文執筆のために、睡眠不足になっているのかと思ったが、その眠気は尋常ではなかった。Ａ子は意識を失うように寝入ってしまった。
　Ａ子が気づくと、ソファの上に寝かされていた。衣服はすべてはぎとられていた。吉永は、下卑た笑いを浮かべて
「なかなかいい体をしているね。ふたりの行為はすべてビデオにとらせてもらった。だから口外は無用だよ」
と言って、Ａ子を震えさせた。そして、今度は、目の覚めたＡ子を相手に行為に及んだという。Ａ子は、あまりの恐ろしさに、抵抗できなかったと言っている。
　その後も、吉永は、Ａ子を脅すようにして関係を結んでいった。
　Ａ子は、この事件がきっかけで、すっかり精神状態が不安定になり、博士論文の執筆もままならなくなったようだ。親が、心配して、病院に連れていった。
　その時、Ａ子は医師にすべてを話したらしい。母親は、医師からＡ子の告白を聞いて驚いた。その後どうすべきか悩んだが、大学のセクハラ相談室に連絡してきたというのだ。
　横山は、ひどい話だと思った。
　この吉永という教授は権力をかさに教え子を陵辱したのだ。こんな男は、即刻クビにすべきだ。いや、犯罪者として警察に突き出すべきだと思った。
　報告書には、吉永の弁明も書いてあった。
「Ａ子さんと関係を持ったのは事実であるが、訴えられている内容と真実はかなり異なる」
とある。
　吉永によると
「Ａ子さんは、知り合いの教授から、本人が博士号をとりたいと希望しているので、ぜひにと依頼を受けて引き受けた学生である。最初は、多忙であるという理由で断ったのだが、Ａ子のたっての希望で、吉永はいやいやながらも引き受けざるを得なかった」
　さらに、吉永がＡ子に迫ったとあるが、事実は、その逆であるとも弁明している。Ａ子は用もないのに、夜遅く吉永の研究室をおとずれ、指導を請うたという。研究室に来るときは、わざと丈の短いスカートなどを穿いてきて、吉永

を挑発するような態度をとっていたという。食事も、相談したいことがあると、Ａ子から誘われたと言っている。
　問題の夜も、吉永が呼び出したのではなく、Ａ子が勝手にやってきたのだという。大学の懇親会で酒を飲んでいたので、最初は断ったのだが、Ａ子が、論文でどうしても聞きたいことがあるというので、仕方なく承諾したのだという。
　研究室を訪れたＡ子は、明らかな薄着で、吉永が指導している間も、体の線をわざと見せ付けるような仕草をとっていた。少し酔いがまわっていたせいもあり、吉永はついに誘惑に負けてＡ子と関係を持ってしまった。これは、教育者としてうかつな行為であり、このことに対しては、何でも責めは受けたいと言っている。
　その後、複数回、Ａ子と関係を持ったが、これもＡ子から誘われたもので、決して、自分から求めたものではないと弁明している。
　横山は、吉永の言っていることは、単なる言い逃れにしか過ぎないと思った。というのも、Ａ子は実際に精神的に病んでおり、博士論文の執筆も止まったままになっている。もし、Ａ子が誘惑したのだとしたら、それで、精神的にまいるはずがない。
　しかし、調査委員会の報告は、吉永をかばうような言い回しに終始していた。そして
「吉永先生も、自分にも非がなかったわけではないというように、今回の件を反省し、自分から大学をお辞めになると申し出られております。今回は、それをもって処分に変えるということではいかがでしょうか」
　実は、調査委員会は、ふたりが、複数回関係を持ったという事実を重く見ていた。
「本当にいやなら、何度も関係など持たないのではないでしょうか」
つまり、これをもって、ふたりの関係は合意のもとになされたという結論を引き出しているのである。
　教授会の流れも、今回は、自分で退職すると言っているのだから、それでいいのではないかという温情判定の方向に傾きつつあった。
「それでは、これより記名投票に移らせていただきます」
と議長が発言したとたん、横山が手を挙げた。山田は、驚いた。横山が自分から会議で意見を言うとは思わなかったからである。
「その結論は、少しおかしいのではないでしょうか」
まわりの教授も、みな驚いている。
「まず、問題は、今回のレイプ事件が、指導教授と、指導される立場にある学生の間で起こったと言う事実です」
横山は、意識するように、レイプ事件とはっきり言った。

「このように、明らかに力関係の異なる場合、力のある側には、かなり厳しい目で接する必要があります。これは、アメリカでは当たり前のことです」
山田も確かに、男と女という関係でしか見ていなかった。
　今回の事件は単なる男女関係ではないのである。指導教授の許しが得られなければ、A子は論文を仕上げることができない。そういう弱い立場にいるのだ。いわゆるパワーハラスメントに相当する。
「それから、調査委員会は、複数回の関係があったことをもって、ふたりは合意していたと結論していますが、これは、明らかな間違いであると思います。あなた方は、立場の弱い女性の視点に立って物事をみたことがあるのですか？」
横山は、明らかに調査委員会を非難するような口調で言った。
「A子さんは、博士論文執筆に向けて必死になって頑張っていたのです。そして、彼女には、吉永先生を頼るしかなかったはずです。その人間に裏切られた。その時のショックは、計り知れないものであったでしょう。それに、彼女は脅されています。自分から進んで関係を持ったのはないのです」
吉永は、最初の行為の場面を、ビデオに撮ったといってA子を脅したとしている。しかし、吉永は弁明書では、そのことを否定していた。
「何よりも、問題は、この事件が引き起こした結果です。A子さんは精神的な打撃を受けて病院に通っています。博士論文も書けない状態です。もし、A子さんが自分から進んで関係をもったのなら、どうして、このような状態になるのですか。もしそうならば、吉永先生の甘い指導で、めでたく博士号を取得しているはずでしょう。いまの現状がすべてを物語っています。私は、懲戒免職が当然の措置と思います」
こう宣言して、横山は座った。
　山田はあっけにとられていた。横山が発言すること自体めずらしいことであるが、これだけ相手を糾弾するというのも珍しい。少々のことは許してしまうのが横山の性格である。
　すると、学部でただひとりの女性教授が手を挙げた。
「横山先生の話を聞いて、女性のひとりとして、とても安心しました。先ほどまでの議論を聞いていると、まるでA子さんが加害者のような言われ方をして、とてもかわいそうでした。今回の決定は、この教授会の信義を問われることになると思います。私も、横山先生の懲戒免職という案に賛成します」
　参加者の何人かは、この発言に拍手をしている。
　調査委員会の面々は、困ったような顔をしている。せっかく、吉永の希望退職で、事を穏便にすませようと思っていたのに、横山が余計なことを言い出したからだ。
　しかし、よく考えれば、吉永に非があるのは明らかである。次第に、教授会

の総意は、懲戒免職処分という方に傾いていった。
　吉永は、教授会で懲戒免職処分の決定が下されたと知らされ、真っ青になったという。せっかく委員会のメンバーに大金を渡して、軽い処分ですますように画策をしていたのに、それが無駄になった。
　実は、吉永は、つぎの就職先をすでに見つけていたのである。それが、懲戒免職となると、簡単には再就職とはいかないであろう。
　その後、吉永は、かなりの額の慰謝料をＡ子に支払い、裁判沙汰になることだけは避けたらしい。しかも、まんまと、都内の別の私立大学の教授に収まっている。一方のＡ子は、その後も自宅にこもりきりという。横山はやりきれない気持ちになった。